

一般社団法人日本生態学会

No.37

2015年9月

ニュースレター

[目次]

第63回日本生態学会大会（仙台）案内2..... 1

記事

I. 運営改革案について..... 13

II. 書評依頼図書..... 14

III. 寄贈図書..... 14

お知らせ

1. 公募..... 14

訂正記事..... 14

書評..... 16

日本生態学会役員・代議員・委員一覧..... 21

京都大学生態学研究センターニュース..... 24

第 63 回日本生態学会大会（仙台）案内

第 63 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ63）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、郵送される文書としては最終的なものですが、プログラムの内容などは随時更新されますので、最新情報は大会公式ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>）でご確認ください。

連絡先

〒 980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3 生命科学研究科
第 63 回日本生態学会大会（ESJ63）実行委員会
担当：中静透（大会会長）、占部城太郎（大会実行委員長）
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2016 年 3 月 20 日（日）～ 24 日（木）
仙台国際センター（<http://aobayama.jp>）（3 月 21 日から 24 日）
仙台市情報・産業プラザ（<http://www.siip.city.sendai.jp/netu/>）（3 月 20 日）

ESJ63 では、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭発表・英語口頭発表・ポスター発表）、企画集会、自由集会、高校生ポスター発表、総会、授賞式・受賞講演会、懇親会を行います。主な日程は下記のとおりですが、申込状況によって変更されることがあります。詳細なスケジュールは、プログラムおよび大会公式ホームページで、追ってお知らせします。今回は、最終日夜まで日程が組まれる予定ですので、遠方の方は最終日も泊って行かれることをお勧めします。

3 月 20 日（日）	各種委員会、代議員会、公開講演会
3 月 21 日（月・祝）	シンポジウム、企画集会、自由集会、フォーラム、一般講演（口頭）、高校生ポスター
3 月 22 日（火）	シンポジウム、企画集会、自由集会、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）
3 月 23 日（水）	総会、授賞式、受賞講演、企画集会、自由集会、懇親会
3 月 24 日（木）	シンポジウム、企画集会、自由集会、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）

提案・申込の締切

【新規に入会する講演者・企画者に関して】

入会（再入会）申し込み 2015 年 10 月 22 日（木）17:00
上記の方の 2016 年学会費 2015 年 10 月 22 日（木）までに入金
（入会手続き <http://www.esj.ne.jp/office/member/guide.html> を参照）

【講演者・企画者に関して】

企画集会申し込み 2015 年 11 月 5 日（木）17:00
自由集会申し込み 2015 年 11 月 5 日（木）17:00
一般講演申し込み 2015 年 11 月 5 日（木）17:00
講演要旨登録 2016 年 2 月 3 日（水）頃 17:00
一般講演口頭発表用ファイルの登録 大会の数日前

【高校生ポスター発表に関して】

高校生ポスター発表申し込み 2015 年 10 月 29 日（木）17:00
高校生ポスター講演要旨送付 2016 年 1 月 27 日（水）17:00

※入会申込は随時受付中です。その他の各種申込は、締切の 1 ヶ月前程度から受け付ける予定です。

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には、対応できません。

諸経費の金額と支払い方法

大会参加費・懇親会費

【大会参加費】

2016年2月2日（火）まで：一般（会員・非会員とも） 10,000円

学生（会員・非会員とも） 6,000円

2016年2月29日（月）まで：一般（会員・非会員とも） 11,000円

学生（会員・非会員とも） 6,500円

大会当日：一般（会員・非会員とも） 12,000円

学生（会員・非会員とも） 7,000円

学部学生以下（会員・非会員とも学生証提示・当日受付に限り） 無料

ご注意：大会参加費の前納金額は、期日までに支払手続きを完了した場合に適用されます。2月29日までは、JTBが運営する参加申込・支払いシステム、アマリス (<https://amarys-jtb.jp/esj63/?&g=0>) からお支払いください。それ以降は大会会場でお支払いください。

【懇親会費】

一般（会員・非会員とも） 7,000円

学生（会員・非会員とも） 4,500円

懇親会は、事前申し込み（2016年2月29日まで）が必要です。

（当日受け付けは現時点で予定していません。必ず事前申し込みをして下さい）

- ・日本生態学会の会員手続きにおいて「定収入のない若手会員」の参加費、懇親会費は「学生」として扱えるよう準備していますので、「定収入のない若手会員（2016年）」と認められた方はその旨を明記して大会参加申込をしてください。
- ・大会参加費のキャンセルポリシーに関しては、大会公式ページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>) をご覧ください。
- ・懇親会費の取消は、2016年2月29日（月）以前は無料、それ以後は返金いたしません。

学会費

2015年10月22日（木）まで：非会員 2016年学会費※

既会員 2015年学会費（未払いの会員は会員権利が停止します）

（詳細は <http://www.esj.ne.jp/office/member/guide.html> を参照）

※大会のための入会（再入会）…上記締切までに2016年1月からの入会を申込み、学会費を納入（学会費返金不可）。

ご注意 学会費と大会参加費は納入先が異なります。

入会申込

下記 URL から申込後、受付メールの指示に従い学会費を納入してください（締切厳守）。

※学会費納入の確認には約一週間かかります。また、郵便振替用紙に受付番号等の記入がない場合、参加申込に必要な会員番号発行の処理が遅れますのでご注意ください。

入会に関する問合せ先（大会に関する問合せには対応できません）

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

日本生態学会事務局

<http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html>

TEL & FAX 075-384-0250

参加・講演申込

- ・下記の説明をよく読むとともに、下記の大会申し込みチャートを参考にして、申し込みに必要な手続きをしてください。
- ・講演・企画される方は、大会公式ホームページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>) の大会登録システムから発表登録して下さい（参加のみの場合、発表登録は不要です）。発表登録されたデータはプログラムや要旨集の作成に利用されます。
- ・大会参加申し込み、及び、大会参加費・懇親会費の納入は、JTB アマリリス (<https://amarys-jtb.jp/esj63/?&g=0>) から行ってください。

一般講演（口頭・ポスター）

・講演者（主たる説明者）になれるのは日本生態学会正会員のみです。既会員の方は、2015年10月22日まで

に2015年会費を納入して下さい。また、発表を希望される非会員の方は、前述の「入会申込」に従って2015年10月22日までに入会し、学会費を納入して下さい。

- ・講演者は、締切までに、大会公式ホームページから発表登録を行ってください。その上で、JTB アマリスより参加の申し込みと参加費納入をお願いします。
- ・発表登録時に発行される大会登録番号は、アマリスで行う大会参加申し込み、及び、後日行う要旨の登録の際に必要となりますので、登録時にご自分で設定するパスワードと合わせて、注意して管理してください。

シンポジウム講演

- ・大会シンポジウムの講演者は、シンポジウム企画者からの指示に従って手続きを進めてください（大会申し込みチャート参照）。
- ・大会企画委員会から認められた招聘・招待講演者を除き、申込・発表できるのは2015年10月22日までに会費を納入した正会員のみです。
- ・大会公式ホームページから発表登録を行い、大会登録番号を取得して下さい。この際、一般講演は「しない」にチェックを入れ、講演タイトルの登録はスキップして下さい。取得した大会登録番号を、講演タイトルとあわせてシンポジウム企画者に伝えて下さい。タイトルは企画者の方でまとめて登録します。
- ・招聘・招待講演者以外は、JTB アマリスから参加申込を行い大会参加費を納入してください。受付開始は9月末の予定です。

企画集会講演

- ・大会企画委員会から認められた非会員講演者を除き、申込・発表できるのは、2015年10月22日までに会費を納入した正会員のみです。
- ・大会公式ホームページの大会登録システムから発表登録を行ってください。この際、一般講演は「しない」にチェックを入れ、講演タイトルの登録はスキップして下さい。取得した大会登録番号を、講演タイトルとあわせて企画者に伝えて下さい。タイトルは企画者の方でまとめて登録します。
- ・発表登録と合わせて、JTB アマリスから参加申し込みを行い参加費を納入してください。
- ・非会員の講演予定者も、会員と同様に発表登録と参加費の払い込みを行ってください。

自由集会講演

- ・自由集会は学会員である集会企画者の責任によって行われ、講演等を行うのに学会員である必要はありません。また、自由集会のみに参加（講演を含む）する場合には大会参加費は不要です。

聴衆としての大会公式行事への参加

- ・JTB アマリスから参加申込を行い参加費を納入してください。当日参加も可能です。
- ・非会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。
- ・大学の学部学生以下（中・高校生を含む）の大会参加費は、聴衆としての参加の場合、無料です（大会公式ホームページからの事前申込は行いませんので、当日大会の受付に学生証提示の上お申し出下さい）。また、高校生ポスター発表会での発表も無料です。ただし、その他の一般講演などで発表する場合は、大会参加費の支払いを含む通常の手続きが必要です。

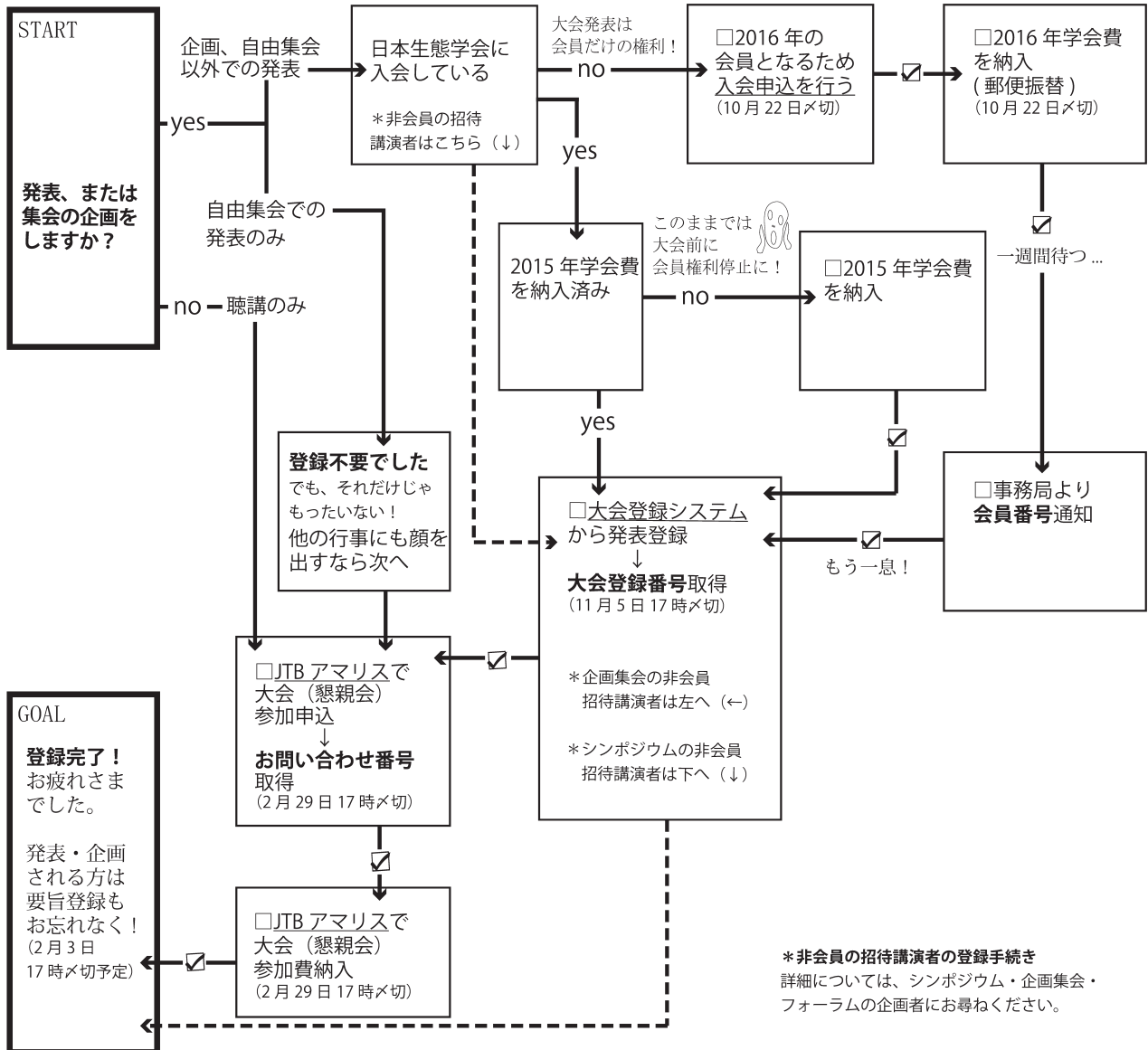
大会参加資格一覧

会員と非会員の大会参加資格は以下の通りです。非会員の資格は限られますので、この機会にぜひご入会ください。なお、講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別\会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ * ¹	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ * ²
自由集会企画	○	
自由集会講演	○	○

- *1 要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。
- *2 大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり1件まで可能です。
- ・非会員が発表・企画を希望される場合は、2015年10月22日（木）までに2016年の入会を申し込むとともに、2016年の学会費を納入して学会員となして下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
- ・高校生ポスター発表会については、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の詳細をご覧ください。
- ・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会申込チャート



名札の事前郵送

- ・当日受付の混雑解消のため、2月29日までに大会参加費を振り込まれた方には、JTB アマリスに登録された住所（日本国内の場合のみ）に名札などを郵送します。当日ご持参の上、直接、発表会場にお入りください。
- ・名札をお忘れになった場合は、当日受付にお申し出ください。
- ・大会参加費を振り込んだにも関わらず、3月14日（月）までに名札が届かない場合は、大会ホームページの問い合わせページからお問い合わせください。

発表登録の注意点

- ・大会登録番号は、要旨の登録の際に必要なとなりますので、発表登録時にご自分で設定するパスワードと合わせて、注意して管理してください。
- ・シンポジウム、企画集会、自由集会、フォーラムの講演は、企画者が一括して申込みますので、講演者が個別に講演申込をする必要はありません。ただし、シンポジウムと企画集会の講演者は、後日講演要旨を登録するため、大会参加申込とは別に大会公式ホームページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>) から発表登録を行い、**大会登録番号**を取得して下さい。(シンポジウムと企画集会で講演する非会員の方も、同様に大会登録番号を取得して下さい)。
- ・申請者の入力ミスは、原則として訂正しない方針です。文字化けについても対応いたしません。

大会プログラム

- ・大会プログラムは、2016年1月頃に大会公式ホームページで公開され、どなたでもご覧になれます。
- ・大会プログラムの冊子は、2016年2月頃に日本生態学会の全ての会員に郵送されます(学会費未納の場合は除く)。プログラムの郵送を希望される会員は、必ず2015年内に2015年の学会費を納入してください。
- ・プログラム冊子は、当日会場受付にて1冊500円で販売します。非会員で冊子が必要な方は、お求めください。

講演要旨集

- ・講演要旨集は、HTML版で作成し公開されますが、冊子体とPDF版は作成しません。
- ・HTML版講演要旨集は、2月中に大会公式ホームページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>) から閲覧できる予定です。インターネット接続機能を持った携帯電話等でご覧頂くことも可能です。また、大会のすべての講演要旨は学会サイト (<http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/index.html>) からZIP形式の圧縮ファイルで一括して入手できるようになる予定で、それを解凍して個人のパソコン等に入れておけば、ネット上と同じように閲覧したり、日程表、講演者やキーワードを検索することが可能です。

各種集会の企画提案

- ・シンポジウムの企画提案はすでに締め切られています。
- ・企画集会、自由集会、フォーラムについては、「企画集会と自由集会」「フォーラム」をお読みの上、企画をご提案ください。
- ・**企画提案時の概要(2015年11月5日(木)締め切り)**がそのままプログラム・要旨集に掲載されます。また、差し替えには一切応じられませんので、ご了承ください。

企画集会と自由集会

- ・本大会では、下記の要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集されます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申込下さい。
- ・企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演(口頭発表、ポスター発表とも)の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者(主たる説明者)は原則、日本生態学会会員に限定されます。非会員による講演は特に事情がある場合に限り、**企画あたり1件まで**認められます(申込方法は下記を参照)。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。また、非会員の講演者に対する大会参加費の免除は行いません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場

として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。

- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- ・**大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。**
- ・自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や代議員会と並行した時間帯等に設定される可能性が高くなっています。これらの委員を企画・講演者・コメンテータ等を含む自由集会についても、原則として開催時間の調整は行いません。

応募要領

- ・企画集会または自由集会の開催を希望される方は、**2015年11月5日(木)17:00**までに大会公式ホームページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/63/>) から集会の提案・概要登録を行って下さい。この際、講演者（主たる説明者及び共同発表者）と講演タイトルも併せて登録します。
- ・企画集会の提案を登録する際、集会企画者と全講演者の大会登録番号および講演タイトルが必要となります。集会企画者は、あらかじめ共同企画者や講演予定者（会員・非会員とも）に連絡して各自の大会登録番号を取得してもらい、その番号を聞いておいて下さい。
- ・**企画提案時の概要がそのままプログラム・要旨集に載ります。また、差し替えには一切応じられませんので、ご了承ください。**

企画集会で非会員の講演を希望する場合

- ・企画者は、集会の提案・概要登録の際に、登録システムの「非会員による講演の申請」欄に、非会員講演者の氏名と、その方の講演を必要とする理由を記入して下さい。
- ・非会員の講演予定者は、他の講演者と同様の手続きにより大会登録番号を取得して下さい（『参加申込』欄を参照）。
- ・以上の手続きの締切は、いずれも2015年11月5日(木)17:00です。非会員による講演の可否は11月17日(火)までに企画者あてメールでご連絡します。

企画集会と自由集会の採否について

- ・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- ・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
- ・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- ・開催の可否については、11月17日(火)までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事。	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事。	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません。
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます。	シンポジウムの次に優先されず（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）。	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	シンポジウムの次に優先されず。	優先されません。
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）。	集会あたり1件まで可（同一非会員の2年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります。	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）。
海外からの招聘講演者に対する学会からの旅費支給	大会全体で最大4名程度認められます。	なし。	なし。
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能。	自由集会・フォーラムのみ可能。	全て可能。
提案締切日	8/27（木）	11/5（木）	11/5（木）
概要登録/集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/5（木）	11/5（木）	11/5（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要のみ掲載されます。

フォーラム

フォーラムとは、生態学会の各種委員会が企画し、生態学会の運営や学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。申込は各委員会代表者が行います（別途ご案内します）。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申込時に希望（口頭発表かポスター発表）をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、英語での発表や、日本語の発表の場合でも一部英語併記を推奨します。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申込時に希望分野を選んでいただきます。一般講演申込のフォームに選択可能な分野一覧が示されます。人数や会場の制約のため、希望された分野で発表できない可能性があります。以下は発表申込のときに示される発表分野（候補）の一覧です。

群落/植物個体群/植物生理生態/植物繁殖/植物生活史/菌類・微生物/景観/遷移・更新/動物と植物の相互関係/進化/生物多様性/数理/動物群集/動物繁殖/動物個体群/動物生活史/行動/保全/生態系管理/外来種/物質循環/生態学教育・普及

注意：

- ・一般講演の講演者（主たる説明者）は、日本生態学会会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
 - ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
 - ・さらに、シンポジウムの企画者・講演者、企画集会の企画者・講演者は、一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。
- これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご理解ください。

口頭発表の方法

- ・口頭発表は、原則として、会場備え付けの機器を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいはPDFによる発表とします（持ち込みのコンピューターは使用できません）。発表用ファイルの登録締め切りは大会開始の数日前となる予定です。詳細は大会ホームページで追ってご案内します。
- ・発表用ファイルを使用せず、印刷物を配布して発表することもできますが、十分な部数の配布物を発表者側で準備して頂きます。また、ファイル登録締め切りまでに、発表用ファイルを使用しない旨、大会ホームページの問い合わせページから申し出てください。

ポスター発表の方法

- ・ポスターボードは縦長（90 cm × 210 cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に2日に分けて行い、最大約1000件のポスター発表を収容できる予定です。ポスター発表の申込数が収容可能数を超えた場合は、一部の方に、口頭発表への変更をお願いすることがあります。
- ・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、英語での発表や、日本語の発表の場合でも、一部英語を併記したり、英語版の別刷りを用意したりすることを推奨します。
- ・ポスターを貼るための画鋏は持参して下さい。例年、会場周辺の店舗では品薄になりますので、ご注意下さい。

ポスター賞

若手研究者の研究活動を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。応募資格については、下記をご参照ください。ポスター発表に関する詳細は大会ホームページにも掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

ポスター賞応募資格について

本大会では、主たる発表者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けます。

1. 一般講演の申込締め切り期限（2015年11月5日）の時点で博士号未取得の若手会員（学部学生、大学院生、研究生）とします。
2. 過去の日本生態学会大会（ESJ）ポスター賞「最優秀賞」または「優秀賞」を受賞した者は、上記の条件を満たしていても応募できないものとします。過去の日本生態学会大会はEAFESと合同で運営された大会を含みます。

ポスター賞審査の要点

選考上重視されるポイントには以下のようなものがあります。ポスター賞応募者は、これらの点に十分考慮してポスター作成をお願いします。

(A) ポスターの情報伝達能力

ポスター発表では、研究内容がわかりやすく表示されているかが重要です。例えば、(1) 良いタイトル、(2) わかりやすい要旨、(3) 視線を引きつける工夫、(4) 短時間でおおまかな内容が伝えられる工夫などが必要でしょう。そのためには、字・図表が遠くからでも判読できる、情報過多でない、説明なしでも要点が理解できることなどが重要です。

(B) 研究の質

(1) 新規性・独創性、(2) データの質・量、(3) 解析方法の妥当性、(4) 議論・結論の妥当性について審査されます。

- ・なお、過去に審査対象であった「発表技術」については、前々回大会より審査対象からはずしました。優れたポスターは読んだだけでその意義を理解できると考えられるためです。また、ポスター賞の応募者が多いため、審査に要する負担が著しく高まっていることも理由の一つです。ただし、ポスターを見ただけでは評価しにくい項目については、審査員が発表を聴き質問して評価することがあります。

- ・また、本学会では国際交流に力を入れて取り組んでいます。このため、**日本語を理解しない研究者に対して配慮がなされているかも重視します**。審査の際には使用言語に関わらずポスターの内容についてのみ評価しますが、審査の結果同票だったポスターについては英語による理解が可能なポスターの順位を繰り上げます。英語による理解が可能なポスターとは、少なくとも、タイトル、イントロおよび結論が英語併記される等して、英語を読むだけで研究の概要を理解できる場合、あるいは英語の別刷りが用意されている場合に該当します。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」は、生態学の社会への普及のため、日本生態学会によるアウトリーチ活動の一環として企画します。大会会期中に高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学に関連する諸分野の研究者や学生との交流を通して、生態学全般への関心をもっていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。なお、高校生ポスター発表会での発表は、大会参加費は不要（無料）です。

昨年度より、「みんなのジュニア生態学講座－高校生と研究者の交流会」を新たに企画しました。気鋭の若手生態学者による高校生向けのトーク（話題提供）と高校生と研究者の交流会を行います。詳細は随時、大会公式ホームページなどでお知らせします。

要項

【日時】2016年3月21日（月・祝）

開場：9:00（到着したら受付を済ませてポスターを貼り出してください）

発表コアタイム（発表・審査）：10:30～12:30（遠方の高校は11:30～12:30）

みんなのジュニア生態学講座（高校生と研究者の交流会）：13:45～15:15

成績発表・表彰式：15:30～16:00（成績発表・表彰式）

【会場】仙台国際センター

ポスター発表：展示室1

交流会・表彰式：Room8

【参加費】無料。発表者の全員（人数に制限なし）および引率者は、大会参加費が免除されます。

【発表資格】原則として、高等学校または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。

【発表内容】生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも受け付けます。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。

【発表数】本大会においては、**1校あたりの発表数は最大4件までとします**。ただし、発表の応募総数が大会会場の収容可能な発表数を超えた場合は、発表件数の多い高校を対象に、発表数の調整をお願いすることがあります。

【発表方法】本大会の指定するパネルサイズ（横90cm×縦210cm）に納まるポスターであること。当日、9:00にはポスターを貼ることができます。発表者（複数可）は、発表コアタイムにポスターの説明を口頭で行ってください。なお、当日9:30までに会場に到着できる高校につきましては、発表登録後にお知らせする講演番号が偶数の高校が10:30～11:30まで、講演番号が奇数の高校が11:30～12:30までをコアタイムとします。遠方の高校で9:30までに会場に到着することができない場合には、11:30～12:30までをコアタイムとします。発表は13:00をもって終了とします。

【審査員】ポスター1件につき複数名の審査員が配置され、質問やコメント、アドバイスをします。

【ポスター賞】選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターは最優秀賞、優秀賞などとして表彰します。

【みんなのジュニア生態学講座－高校生と研究者の交流会】日本生態学会で現在大活躍中の若手3名に、ご自身の研究内容だけでなく、生態学の研究を目指したきっかけや中学～高校の様子を語って頂きます。

- ・細 将貴（京都大学・白眉センター）「右利きのヘビと左巻きのカタツムリ」
- ・岡本 朋子（岐阜大学・応用生物科学部）「匂いで虫をよぶ花と、花の匂いを進化させる虫」
- ・角谷 拓（国立環境研究所）「生物分布の変化を予測し保全に活かす」

申込み手順

- ・発表を希望する高校は、2015年10月29日（木）17:00までに、電子メールで件名に『みんなのジュニア生態学』と記入して、下記、申込事項（1）～（4）を送付先メールアドレスに送ってください。なお発表希望申込数が非常に多い場合には、申込先着順で打ち切る可能性もありますので、早めのお申込をよろしくお願ひいたします。
- ・発表要旨（日本語で500字以内）は、2016年1月27日（水）17:00までに電子メールで件名に『みんなのジ

ユニア生態学発表要旨』と記入して、メール本文に貼り付けて以下の送付先メールアドレスに送ってください。文字化けの原因となる文字（囲み数字、囲みアルファベット、外字）が含まれていないかを送信前に確認してください。

【注意】大会企画委員会高校生ポスター部会が申込や要旨登録の不備に対応するため、高校生ポスターの申込と要旨登録の締め切りは一般講演よりも早めになっております。くれぐれもご注意ください。なお、申込内容や要旨の修正の要望が例年多数寄せられます。登録段階で以後の修正がないようにご配慮をお願いします。これらの修正は、一般講演の締切後は、いかなる理由があろうとも対応できませんので、あらかじめご承知願います。

申込事項

(1) 責任者（顧問教員、保護者など）の情報

- a. 氏名（フリガナも）
- b. 住所（職場／自宅を選択）
- c. 電話番号（職場／自宅／携帯を選択）
- d. E-mail アドレス；
- e. 緊急の連絡先（責任者の電話番号など）
- f. 連絡してよい時間帯

注）申込に関する責任者は教員や保護者とします。必ずしも、大会当日に生徒を引率する方でもかまいませんが、要旨登録などの諸手続きに責任を負っていただける方にしてください。なお、e. 緊急の連絡先には、大会当日だけでなく、大会準備期間にもご連絡差し上げる可能性がございます。日本生態学会は各種申込の締め切りに非常に厳格です。発表申込や要旨登録の締め切り直前に、登録内容の不備を発見した場合などには、緊急で連絡させていただくことがあります。あらかじめご了承ください。

(2) 学校の情報

- a. 高校名（フリガナも）
- b. 高校の住所
- c. 高校の電話番号（代表）

(3) 発表ポスターの情報

- a. タイトル
- b. ポスター著者全員の氏名と所属
表記例：山田花子、田中太郎（仙台科学高校）、鈴木一郎、伊藤さちこ（仙台農業高校）

注）顧問教員の方もポスター著者に加わることができます。

- c. 発表者の氏名（高校生に限る）
第一発表者の氏名には必ずフリガナを振って下さい。
表記例：山田花子（ヤマダ ハナコ）、田中太郎

注）ポスター著者のうち、実際に大会に参加し発表する方の氏名を書いてください。引率者を含めないでください。

(4) 引率者の情報

- a. 氏名（フリガナも）
- b. 引率者の緊急の連絡先（携帯電話番号）

送付先／お問合せ先

大会企画委員会・高校生ポスター担当 高原輝彦
〒690-8504 鳥根県松江市西川津町 1060
鳥根大学生物資源科学部生物科学科
E-mail: hs_poster@mail.esj.ne.jp

英語口頭発表賞

本大会では、第三回英語口頭発表賞を実施します。賞の運営・審査については下記をご参照ください。英語口頭発表賞の詳細は、ウェブサイト（<https://sites.google.com/site/esj63engpresenawardjp/>）にも掲載しますので、準備の参考にしてください。

運営・審査方針

この賞には、大会での英語を用いた「科学コミュニケーション」を振興する目的があります。本賞は単なる英語スピーチコンテストではなく、英語の流暢さそのものを競うものではありません。応募者には発表の学問的内容と人に伝える技術や姿勢を競っていただきます。応募者は聴衆の多くが必ずしも英語を母国語とはしないこと、

また、さまざまな研究背景を持つことを前提に、自身の研究成果をより多くの人にわかりやすく伝えるよう努力してください。結果として意思伝達が不十分な場合でも伝達しようとする意欲や工夫を審査では評価したいと考えています。さらに今年度も、賞の審査対象に該当する若手の発表（＝審査対象発表）に加えて、一般の参加者の発表も応募する予定です。これにより、発表総数を増やし、英語口頭発表賞セッションをよりいっそう盛り上げていこうと考えております。

運営の流れ

- ・応募者は英語口頭発表賞に仮エントリーする（9月1日締め切り）。
- ・英語賞部会が講演内容別に複数のセッションに振り分けます。このとき応募者多数の場合は部門によっては一部を不採択としたり、応募者少数の場合は、部門ごとに分かれずに分野横断的に審査を行ったりする場合があります（9月下旬までに決定）。
- ・英語賞部会は部門毎に最低3人の審査員を依頼します。
- ・英語賞部会はエントリーした応募者に、発表賞参加の採否を伝えます。同時に参加申込と大会登録を行うよう応募者に通知します（9月末まで）。
- ・賞該当発表の部門の枠組みが決定後に、一般の参加者の発表も「一般講演」の枠組みの中で応募します。

審査方法の大枠

英語口頭発表賞は、単なる英語スピーチ能力のコンテストではありません。講演者は自身の流暢な英会話力を単に売り込むのではなく、聴衆との円滑で満足度の高い「科学コミュニケーション」を図るための努力を熱意と誠意をもって示してください。

- (1) 各審査員は各発表を研究の中身（質）への比重を50%、聴衆への配慮や熱意などへの評価を50%とし、絶対評価します。
- (2) 上記評価は絶対評価のため、審査員ごとに上位1、2、3位を選び、その順位を集計して部門ごとに受賞者を決定します。

スライド作成上の注意

口頭説明の言語は英語ですが、発表スライドは英語または和英併記とします。

審査方法の詳細は以下のURLをご覧ください。

<https://sites.google.com/site/esj63engpresenawardjp/>

公開講演会「生態学から見た東日本大震災」

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震および津波は、特に東北地方の太平洋沿岸の広範な地域に甚大な被害をもたらした。この地震と津波により、この地域の沿岸生態系にも様々な変化が起きた。また、福島第一原子力発電所周辺では放射性物質が大量に放出され、今なお広い地域が立ち入り禁止となっており、そこでは里地の植生の変化や、特定の野生動物の増加が大きな問題となっている。本講演会では、東北沿岸で地道な調査を続けてきた研究者が東日本大震災発生からの5年間を振り返り、大地震と津波によって生態系に何が起こったのか、その後どのように変化してきたのかということに向けて報告する。その報告を踏まえ、将来の震災に対し、生態系サービスや生物多様性を維持していくために、どのような努力が我々に可能なのかを参加者とともに考え、議論を深める予定である。

講演会タイトル：「生態学から見た東日本大震災」

日時：2016年3月20日（日）13:00～16:00

会場：仙台市情報・産業プラザ多目的ホール（<http://www.siip.city.sendai.jp/netu/>）

プログラム

開会の辞：中静 透（東北大学）

講演：講演：横山潤（山形大）、平吹喜彦（東北学院大）、黒沢高秀（福島大）、鈴木孝男（東北大）、小寺祐二（宇都宮大）

懇親会

懇親会は3月23日（水）18:30から、仙台国際ホテルで行います。東北の地酒を豊富にご用意いたしますので、ぜひご参加ください。参加申し込みと納入はJTB アマリス（<https://amarys-jtb.jp/esj63/?&g=0>）からお願いします。

託児所

2016年3月21日～24日の期間、大会会場（仙台国際センター）に託児室を設置する予定です。開設時間や

申込方法などの詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

エコカップ 2016 仙台大会

大会サテライト企画として、日本生態学会大会に合わせて開催されてきた親善フットサル大会（5人制のミニサッカー）は、大会前日の3月19日（土曜日）午後12:00よりワッセ仙台で開催されます。エコカップは、2002年日本生態学会仙台大会から始まりました。詳細はホームページ（<http://meme.biology.tohoku.ac.jp/ecocup2016/index.html>）にてご確認ください。

宿泊・交通案内

大会中の宿泊は各自での手配をお願いします。JTB アマリスにも宿泊に関する情報が掲載される予定です。仙台市内には多くの宿泊施設がありますが、大会前後には他の学会大会やイベントが予定されており大変混雑すると予想されています。宿泊の予約は早めにされることをお勧めします。

公開講演会場（仙台市情報・産業プラザ）へはJR 仙台駅から、大会メイン会場（仙台国際センター）へは地下鉄東西線「国際センター駅」下車でお越し下さい。なお、国分町等の繁華街から仙台国際センターへは徒歩20分程度です。

仙台空港から、JR 仙台駅へは仙台空港アクセス線をご利用ください（所用時間 30 分）。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

記事

I. 運営改革案について

学会運営と大会運営体制の見直しについて、鹿児島大会の総会（2015年3月20日）や会長メッセージ（2014年11月21日）で説明し、改革の趣旨についてはすでにご了解いただいておりますが、このほど、運営改革作業部会の答申に基づき、執行部案をまとめ、2015年7月11日の理事会で審議いただきました。理事会では、(1)執行部案が改革目的を達成するためにふさわしい内容であるか、(2)執行部案を実行した場合、学会財政の健全性は保たれるのか、の2点について評価いただき、承認されましたので報告いたします。

主な改革内容としては、

1. 会員がボランティアで開発・管理してきた大会登録システムを業者が提供する汎用システムをカスタマイズしたものに切り替える。
2. 大会実行委員会・大会企画委員会がボランティアで実施している作業の一部を業務委託する。
3. 大会運営とのスムーズな連携をはかるため、現在事

務局が行っている会員管理業務の大部分を業者に委託する。

4. 外部委託によって軽減した事務局負担分を大会運営サポート業務等に振り分ける。

の4点で、これまで会員に提供してきたサービスはほぼ引き継がれます。

以上のように現行のサービスを維持しつつ、会員登録、参加登録、要旨登録、編集などの業務を外部委託することによって、会員のボランティアワークへの依存度を下げることができます。これによって、今後も大会運営体制を維持できると考えています。なお、委託先には多数の関連会社を対象に検討した結果、(株)国際文献社に決定しました。現在、契約に向けた作業を進めています。

システムの移行には、学会運営と大会運営をあわせて約400万円の初期費用がかかります。これに対しては十分な繰越金がありますので、問題は生じないと判断しています。一方、経常にかかる費用は、学会運営が約400万円、大会運営が約600万円で（表を参照のこと）、現在の収入に変化がないと仮定すると単年度で約180万

表. 現在の収入に変化がない場合の一般会計予算案（見込）

会計年度	14 決算	15 予算 (鹿児島)	16 予算 (仙台)	17 予算 (東京)	18 予算 (札幌)	19 予算 (未定)
収入の部						
年会費	39,168,600	39,000,000	39,000,000	39,000,000	39,000,000	39,000,000
科研費	17,600,000	18,900,000	17,900,000	17,900,000	17,900,000	17,900,000
全国大会収入	22,524,600	18,500,000	18,500,000	18,500,000	18,500,000	18,500,000
その他	8,753,369	6,590,000	6,490,000	6,490,000	6,490,000	6,490,000
地区会からの寄付金	11,431,777					
前年度繰越金	53,748,925	71,239,961	76,579,961	72,587,401	70,144,054	68,288,694
収入の合計	153,227,271	154,229,961	158,469,961	154,477,401	152,034,054	150,178,694
支出の部						
会誌発行費（国際化推進費を含む）	38,590,755	31,850,000	30,850,000	31,278,469	31,421,294	31,421,294
全国大会支出	21,730,012	18,500,000	14,020,000	14,020,000	14,279,629	14,279,629
地区会活動費	960,136	2,500,000	2,500,000	2,500,000	2,500,000	2,500,000
その他	20,412,507	24,300,000	24,770,000	25,007,078	24,726,845	25,356,443
学会運営改革推進費						
会員管理委託費（初期）			1,782,000	0	0	0
会員管理委託費（経常）			4,050,000	4,125,000	4,125,000	4,125,000
大会運営委託費（初期）			1,330,560	0	0	0
大会運営委託費（経常）			6,080,000	6,080,000	6,192,592	6,192,592
WEB 選挙システム経費（初期）				580,800		0
WEB 選挙システム経費（経常）				242,000		242,000
小計			13,242,560	11,027,800	10,317,592	10,559,592
法人税	293,900	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000
次年度繰越金	71,239,961	76,579,961	72,587,401	70,144,054	68,288,694	65,561,736
支出の合計	153,227,271	154,229,961	158,469,961	154,477,401	152,034,054	150,178,694
収支の部						
単年度収入	99,478,346	82,990,000	81,890,000	81,890,000	81,890,000	81,890,000
単年度支出	81,987,310	77,650,000	85,882,560	84,333,347	83,745,360	84,616,958
単年度収支	17,491,036	5,340,000	-3,992,560	-2,443,347	-1,855,360	-2,726,958

円ー約 270 万円（選挙費用などによって変異する）の赤字が発生します。現在、7600 万円を越える繰越金がありますので、この程度の単年度赤字は当面は十分に吸収できますが、単年度赤字を放置することはできませんので、財政構造の見直しに関して落ち着いて取り組む必要があると認識しています。

執行部では、単年度収支の均衡に向けてどのような対応をとるべきか、会員の皆さんのご意見をうかがう機会を設ける準備を進めています。2016 年の仙台大会では、学会が取り得る選択肢を説明し、アンケート調査などを行いたいと考えておりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

会長 齊藤 隆

Ⅱ. 書評依頼図書 (2014 年 12 月～2015 年 8 月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 占部城太郎編「湖沼近過去調査法 より良い湖沼環境と保全目標設定のために」(2014) 244pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05735-7
2. 西條辰義監修・亀田達也編著「フロンティア実験社会科学 6『社会の決まり』はどのように決まるか」(2015) 202pp. 勁草書房 ISBN:978-4-326-34916-6
3. 渡辺守著「トンボの生態学」(2015) 262pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060196-2
4. 藤崎憲治著「絵でわかる昆虫の世界 進化と生態」(2015) 198pp. 講談社 ISBN:978-4-06-154769-8
5. 日本生態学会編 森田健太郎・池田浩明担当編集「現代の生態学 3 人間活動と生態学」(2015) 260pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05743-2
6. 黒倉寿編「水圏の放射能汚染 福島の水産業復興を目指して」(2015) 186pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1484-6
7. 大黒俊哉・吉原佑・佐々木雄大著「草原生態学 生物多様性と生態系機能」(2015) 166pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062225-7
8. 日本土壌肥料学会編「世界の土・日本の土は今一地球環境・異常気象・食糧問題を土から見ると」(2015) 128pp. 農文協 ISBN:978-4-540-14260-4
9. 宮下直・西廣淳編「保全生態学の挑戦 空間と時間のとらえ方」(2015) 242pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060228-0
10. 日本生態学会編 巖佐庸・館野英典担当編集「現代の生態学 1 集団生物学」(2015) 404pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05744-9
11. 大園享司著「カナディアンロッキー 山岳生態学のすすめ」(2015) 316pp. 京都大学学術出版会

ISBN:978-4-8768-871-6

Ⅲ. 寄贈図書

1. 「北海道は中両棲類研究報告 Vol.3」(2015) 32pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
2. 「うみうし通信 No.87」(2015) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
3. 「東京大学大気海洋研究所 要覧・年報 2015」(2015) 124pp. 東京大学大気海洋研究所

お知らせ

1. 公募

(1) 平成 28 年度笹川科学研究助成

①課題の設定が独創性・萌芽性をもつ研究、発想や着眼点が従来にない新規性をもつ若手の研究を支援します。

【学術研究部門】

- ・大学院生（修士課程・博士課程）
- ・35 歳未満の若手研究者

【実践研究部門】

- ・博物館、学校、NPOなどに所属している者
- ② 1 件あたりの助成額の上限は、学術研究部門は 100 万円、実践研究部門は 50 万円とします。
- ③【学術研究部門】平成 27 年 10 月 1 日～10 月 15 日
【実践研究部門】平成 27 年 11 月 1 日～11 月 16 日
- ④公益財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

(2) 鹿島学術振興財団 2015 年度研究助成

- ①我が国の学術の発展並びに学術の国際交流を図るため、都市・居住環境の整備、国土・資源の有効利用及び文化的遺産・自然環境の保全等による国民生活の向上に寄与する研究に対して助成。
- ②総額 3,700 万円 1 研究課題への助成金は、継続期間（2 年目）を含めて合計 300 万円以内。
- ③ 2015 年 11 月 10 日（火）
- ④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(3) 第 54 回（平成 27 年度）下中科学研究助成

- ①学校教育に携わる先生等の教育のための真摯な研究を助成。
- ②総額 300 万円。1 件当たり 30 万円。30 件予定
- ③平成 27 年 12 月 10 日（当日消印有効）
- ④公益財団法人下中記念財団事務局

訂正記事

ニュースレター No.36 P24、2015 年度予算案＜一般会計＞の前年度繰越金に誤りがありました。以下に訂正いたします。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	14 決算	15 予算		14 決算	15 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,743,525	29,500,000	ER	11,339,878	18,000,000
正会員（学生）	6,760,075	6,500,000	生態誌	2,902,893	4,000,000
賛助会員	2,296,000	2,200,000	保全誌	1,362,120	2,000,000
地区会費	369,000	800,000	ニュースレター	934,159	1,000,000
小 計	39,168,600	39,000,000	ER 英文校閲・翻訳		2,500,000
ER 売上還元金	1,550,000	1,650,000	ER 誌 Open Access 経費		4,000,000
編集事務費用	1,950,000	2,000,000	和文誌編集費	899,189	350,000
学会誌売上げ	1,237,200	1,200,000	小 計	17,438,239	31,850,000
科研費			会議費	169,442	200,000
国際情報発信強化 A	17,600,000	17,600,000	旅費・交通費	1,560,899	2,500,000
公開講演会	0	1,300,000	人件費	10,449,086	13,500,000
小 計	17,600,000	18,900,000	地区会活動費	960,136	2,500,000
出版印税	1,150,255	1,000,000	大会支出	21,730,012	18,500,000
広告代	180,000	180,000	公開講演会	1,300,137	1,000,000
著作権使用料	367,011	350,000	INTECOL 会費	469,409	450,000
ER 超過ページ代	2,052,100	100,000	事務費		
大会収入	22,524,600	18,500,000	通信費	955,429	800,000
講習会費	260,000	100,000	消耗品費	358,350	300,000
その他	6,803	10,000	雑費	1,323,511	300,000
地区会からの寄付金	11,431,777		銀行手数料	154,416	150,000
前年度繰越金	53,748,925	71,239,961	レンタルサーバ料	0	470,000
			事務所維持費	1,540,000	1,680,000
			税務費用	388,238	300,000
			小 計	4,719,944	4,000,000
			各種委員会費	770,872	1,500,000
			選挙費	0	600,000
			EAFES 費用	246,850	200,000
			講習会費	725,868	350,000
			国際化推進費		
			編集委託費	6,481,632	
			英文校閲・翻訳	2,432,976	
			編集委員会開催等	464,916	
			電子化関連費	469,756	
			シンポ・セミナー開催関連	3,668,792	
			人件費	2,692,428	
			論文 OA・FA に係る経費	4,099,312	
			広報費	810,756	
			消耗品費	31,948	
			小 計	21,152,516	
合 計	153,227,271	154,229,961	法人税	293,900	500,000
			次年度繰越金	71,239,961	76,579,961
単年度収入	99,478,346	82,990,000	合 計	153,227,271	154,229,961
			単年度支出	81,987,310	77,650,000

書評

藤崎憲治・大串隆之・宮竹貴久・松浦健二・松村正哉著
(2014)「昆虫生態学」朝倉書店 224pp. ISBN:978-4-254-42039-5 定価 3700 円 (税別)

前書きに書かれているとおり、本書はわが国で最初の昆虫生態学の教科書である。手に取る前は、教科書にありがちな、堅苦しく、難解な本を想定していたが、古典ともいえる事例から最先端の研究までを網羅しているにもかかわらず、とてもわかりやすく書かれていて、読み出したら一気に読み終えてしまった。読んだ後に徐々に充足感を感じた本である。

どんな学問の分野にも共通することだと思うが、一つの分野内でもさらに細分化・専門化が進み、一人だけで教科書を書くのは大変困難な時代になりつつある。そのため分担執筆の教科書が増える傾向にあるが、そのような本は分担者の表現力の違いがそのまま文章に表れる。ところが本書ではそのような違和感をあまり感じることがなかったため、とても読みやすかった。本書を書くにあたって、著者たちは互いに書いた内容を読み合い、問題点を指摘しあい、できるだけ平易な教科書になるように心がけたという。専門書は内容もちろん大事であるが、本として読み継がれるという点で、わかりやすく読みやすい文章は本としての寿命を支えていると言ってもよい。著者らによるそういった陰の努力によって、本書はわが国の昆虫学のバイブルになりうると思う。

本書は6つの章から成り立っている。序論で昆虫の分類や進化などについて解説し、他の章との関連と概略が述べられている。近年の進化発生生物学によれば系統的に昆虫に最も近い節足動物は甲殻類であり、クモやダニなどはむしろ三葉虫に近いことは本書ではじめて知った。

第2章では、昆虫の生活史戦略について述べられている。休眠と移動・分散、生活史戦略の理論が解説され、さらに気候温暖化が昆虫の生活史に及ぼす影響についても興味深い、最近の研究が取り上げられている。気温の変動が少なく安定した熱帯に生息する昆虫の方が、温度適応の幅が狭いため、気候温暖化による絶滅リスクが高いそうだ。実際に熱帯アフリカ低地では、熱帯熱マラリアを媒介する蚊の幼虫の発育が悪影響を受けているらしい。さらに、この章では熱帯・亜熱帯の昆虫の休眠についても解説されており、このことは日本語の本としては珍しいと思う。

第3章では、昆虫の個体群と群集について解説されている。昆虫生態学という本書のタイトルからすれば王道の部分であり、本章だけで1冊の本が書ける内容が50ページほどにまとめられている。古典的なロジスティック成長モデルから最新の生態進化ダイナミクスまでが解説されており、充実した内容になっている。

第4章と5章は行動生態学と社会性昆虫について書かれている。本書に述べられているとおり、社会性昆虫の研究には難解なイメージが付きまとう。通常なら行動生

態学と社会生物学は切り離せないものであり、一人の専門家によって執筆される場合が多い。ところが、本書では社会性昆虫の章を独立させて、行動生態学と社会性昆虫の第一人者がそれぞれ担当している。この企ては成功していると思う。読む側は、第5章の冒頭で階層性という概念を認識し、頭を切り替えることができる。なお、哺乳類学者の間では個性という概念が認知され、大型哺乳類では個体史研究という考え方も提唱されているが(落合 2008)、昆虫でも個性の研究が進んでいることが第4章で述べられている。

第6章は害虫の生態と管理について書かれている。害虫化とその要因、害虫の特性について述べた後、害虫管理法と発生予察、殺虫剤抵抗性、化学的防除以外の防除法や最近の害虫管理についての知見が解説されている。昔なら雑草として刈り取られてしまうような植物でもむしろ天敵を保護する役割が見直されたため、水田の周辺に寄生蜂の蜜源になるような植物を栽培することがベトナムなどで行われ、エコロジカル・エンジニアリングと呼ばれることをこの章を読んで知った。

同じ出版社から出された、「応用昆虫学の基礎」と比べて本書は活字を小さくし、その分1ページあたりの分量を多くして、ページ数はほとんど同じであるにもかかわらず内容が詰まっている感じを受けた。それでも、たとえば送粉生態系など割愛されている部分は多い。著者達も出版社側も本書を安くするためにかなりの努力をされていると思うのだが、できたらもう少しページ数を増やして出来る限り昆虫生態学の内容を網羅して欲しいと感じるのは、評者一人ではないであろう。

落合啓二(2008) 6. 社会構造と密度変動—ニホンカモシカ・高槻成紀・山極寿一編, 日本の哺乳類学 2. 中大型哺乳類・霊長類. 東京大学出版会, 東京. pp. 172-199.

中筋房夫, 内藤親彦, 石井実, 藤崎憲治, 甲斐英則, 佐々木正己(2000) 応用昆虫学の基礎. 朝倉書店, 東京.

(長崎大学熱帯医学研究所 角田 隆)

山本民次・花里孝幸 編著 (2015)「海と湖の貧栄養化問題—水清ければ魚棲まず」208pp. 地人書館 ISBN:978-4-8052-0885-4 定価 (2400 円+税)

1970年代後半から1990年代にかけて、我が国の社会的に重要な湖沼や瀬戸内海では富栄養化が深刻化し、それら水域の水質改善とこれを行うための社会システム構築が重要な課題であった。例えば琵琶湖では、1970年代後半から行政と一般市民が中心となって有名な石けん運動を展開し、富栄養化の原因であるリンの琵琶湖への負荷を大きく低減させ、2000年代に入ってからデータ上で見える形での全リンおよびクロロフィル濃度の低下、透明度の上昇が見られている。このような傾向は琵琶湖にとどまらず、諏訪湖や霞ヶ浦などの国内湖沼や瀬戸内海でも同様である。

しかし、行き過ぎた水質改善に伴う新たな問題が顕在化してきている。それが本書で取り上げている「富栄養化」である。この問題は、簡単に言えば、湖沼等の閉鎖

性水域への窒素・リンの栄養物質の負荷を削減し過ぎたため、植物プランクトンの生産が低下し、これに続く動物プランクトン・魚類の生産も低下してしまうことである。が、本書ではこれに加えて様々な事例が記載されているだけでなく、レジーム・シフトなどの学術的解釈を加え、さらには貧栄養化に伴う生態系サービスの変化についても詳細な検討がなされており、大変興味深い。筆者が愛媛大学沿岸環境科学研究センターに所属していた2000年初めころ、「貧栄養化」についてはすでに瀬戸内海の研究者の間では話題となっていた。その後、新聞による報道や筆者自らも琵琶湖の研究に携わっていることから、貧栄養化については多少実感を伴うようになっていたが、本書で紹介されているほどすでに多くの取組がなされているとは全く存じ上げなかった。先述の通り、「貧栄養化」はすでに数年前から新聞等マスコミで紹介されたことがある（ただし、「貧栄養化」という語そのものを扱っていたかどうかは定かではない）が、陸水と海洋を両方扱い、まとまった学術情報として研究者以外の読者層にも広く公表されたものは、本書が初めてである。瀬戸内海ではすでに2012年から「貧栄養化」への対策が行われている（本書の第四章参照）が、琵琶湖はこれからどうするか？といった段階であり、「貧栄養化」について何らかの対策を求められてきている行政のほとんどはおそらく琵琶湖と同じ状態にあると思われる。そのようなある種混沌とした社会状況の下での本書の刊行は、まさにタイムリーといって差し支えない。

本書では、レジーム・シフトとヒステリシスを用いる解釈が大変多くなされており、これらは概ね成功している。レジーム・シフトについては、第一章の諏訪湖の例において、「水がきれい、魚もたくさん獲れた」時代があったことの解釈が見事である。また、本章ではヒシの繁茂による底質悪化にも言及されており、大変興味深い。第三章でも瀬戸内海を例としてレジーム・シフトやヒステリシスに言及しているが、本章ではそのほかにもストックとフロー、およびロトカ・ヴォルテラを用いた数理解析を駆使するなど、データをより学術的に議論する工夫がなされており、一般の方々だけでなく研究者にも読み応えのある本となっている。

第四章でも第三章と同様、瀬戸内海の実例が報告されているが、第三章とは異なり、主に貧栄養化の水産業への影響の事例と行政による取組が紹介されている。この章を読んで、私は恥ずかしながら初めて知ったのであるが、瀬戸内海では貧栄養化に対応するために栄養塩類供給を近年行っているとのこと。この取り組みは大変重要なものである。私の研究対象である琵琶湖でこれをやるか？となると、事は慎重に進めるべきと言わざるを得ない。

第五章は、瀬戸内海のアマモ場を対象として、貧栄養化に伴う生態系サービスの変化が説明されている。本章では、アマモによる調整サービスに特に力点が置かれているが、私にとって印象深かったのは本章におけるアマモの文化サービスの記述である。本章の著者は、アマモの文化サービスについてルアーフィッシングを例として取り上げて解説しているが、これは大変良く調べてある。

琵琶湖でも、ブラックバスに対するルアーフィッシングは大変盛んであり、今までは私は我々の調査船にいつも引っかかっているテグスと釣り針付きのルアーを嫌悪をもって取り外していたが、これからは別の見方もした方が良いかもしれない。

第六章では貧栄養化の他国の例を報告している。北海南東部に生息するプレイスという冷水性魚類の漁獲量が2000年以降に急減していることについて、貧栄養化、天敵による捕食、人間による乱獲などさまざまな要因を上げている。貧栄養化の問題は、国際的にもその研究は端緒をついたばかりであるようだ。

第七章は、「覚え書き」と銘打っており、貧栄養化の水産業と人間社会への影響をまとめている。本章では、大豊漁についてのエピソードに始まり、続いて「人間社会は、貧栄養化にどう反応しているか」を概説している。これらは、瀬戸内海で漁業に携わる人々が、海の恵みに依存しつつもしたたかに生きてこられたことを物語る。その他にも、第二次世界大戦前は、夜光虫の赤潮はイワシが取れる前兆として歓迎されていたことや、プロダクトアウト型とマーケットイン型、貧栄養化でヘドロが減少することなど、オムニバスの興味深い事例が記載されている。そういえば、本章で述べているように、最近、海の沿岸でフナムシを見かけなくなった。

さて、最後になるが、琵琶湖に言及した第二章である。本書では、様々な水域における魚類等の生物生産量の低下の原因について、貧栄養化を主要なものとして議論を進めている。これに対して第二章では、栄養塩類と漁獲量の両者の直接的因果関係は必ずしも明確ではないとしている。このことはとても重要な指摘であるが、一方で、清浄であった昔の琵琶湖を取り戻すべく県民・行政・民間企業が一体となって取り組んできた様々な努力をどう考えるのか、我々は今後琵琶湖とどう付き合えば良いのか、を慎重に議論しなければならない。

本書は、陸水・海洋を問わず、水環境の保全に少しでも関わる立場の人々は必ず読むべきものであり、水環境が抱える喫緊の課題を紹介するだけでなく、自然界に対して人間が行う行為にバランスを持たせることがいかに難しいのかを教えてくれる。最近の10年間、全国各地の水域で環境モニタリングについての予算や人員の削減が進められている。我が国の財政状況が大変に厳しいことはある程度理解してはいるけれども、身近な水環境をきちんと知ることができなくなることについては将来への不安がある。我々人間は、自然界のことを未だほとんど何も知らないのである。

(京都大学・生態学研究センター 中野伸一)

H.G.Jones・R.A.Vaughan 著 久米篤・大政謙次監訳 (2013)「植生のリモートセンシング」森北出版株式会社 480pp. ISBN:978-4-627-26101-3 定価 6500円(税別)

本書は H.G. Jones & R.A. Vaughan 著『Remote sensing of vegetation: principles, techniques and applications』(Oxford University Press, 2010) の日本語訳である。

本書は以下の章からなる。

- 1 はじめに
- 2 植生のリモートセンシングのための放射物理学の基礎
- 3 植生、土壌、水の放射特性
- 4 植物の群落と機能
- 5 地球観測システム
- 6 光学データの準備と取り扱い
- 7 植生特性の観測と画像分類のためのスペクトル情報の利用
- 8 植生構造の多方向リモートセンシングと放射伝達特性のモデル化
- 9 群落の物質・熱交換のリモートセンシング
- 10 サンプリング・誤差・スケーリング
- 11 リモートセンシングの総合的な利用

本書の著者の一人 H.G. Jones は、2014 年に第 3 版が出版された、定評ある植物生態生理学の教科書『Plants and microclimate』(Cambridge University Press) の著者でもある。そのような著者らしく、本書の章立てからわかるように、観測方法の物理学的原理や植物生理生態学の基礎に始まり (2～5 章)、様々なりモートセンシング (以下リモセン) 手法の植生研究への応用例まで (6～11 章) が解説されている。リモセンについての既往の日本語書籍は、リモセンの技術的側面のみを扱ったものがほとんどであった。その意味で、リモセンの手法を理解するために必要な物理学・生態学の基礎から解説する本書は、訳者序文のいうとおり、「リモセン技術をあまり理解していない植物関連の研究者・技術者と、植物の生理生態をあまり理解していないリモセン研究者・技術者に対して、共同作業を行うための基盤となる適切な知識体系を提供」するものである。評者はまさに前者の「リモセン技術を理解していない植物研究者」に該当しており、本書の読者としてふさわしい。かといって、本書の原著を英語で読むのは、リモセンについての基礎知識が乏しいため、かなり厄介と思われる。評者のような読者が本書を日本語で読むことができるのは幸運である。日本語版で 446 ページにもなる膨大な本書を翻訳・出版された翻訳チームと出版社に敬意を表したい。

リモセンというと、衛星画像や航空写真、レーザービームの反射を利用する航空機ライダーシステムなどを用いた広域観測をイメージする人が多いのではないだろうか。本書でも、衛星や航空機を「観測プラットフォーム」(観測器を搭載する施設ないし機器) とする広域リモセンについての内容が多くを占め、急速に進歩するこの研究分野を俯瞰できるような知識を体系的に提示している。本書では簡単にしか触れられていないが、最近話題になっているドローン (UAV = 無人飛行機ともいう) も低コストな観測プラットフォームとして注目されているようだ。近年、衛星画像や航空写真自体は容易かつ安価に入手できるようになったが、素人目には画像処理や解析方法が厄介そうである。本書の 6～7 章で、画像処理とそれに基づく植生解析が解説されている。

しかし、リモセンとは「測定対象から離れた測器によって情報を集める技術」(本書はじめに) 一般をさし、

たとえば、畑で栽培している作物の葉の蛍光測定により葉の養分状態を診断する方法 (11 章) など含まれる。このような方法は、形容矛盾のように聞こえる「近接」リモセンと呼ばれるらしい。そう言われてみれば、テレビの「リモコン」(リモートコントローラー) だってテレビ本体の直近で使うこともでき、本体とコントローラーの間の距離は問題ではない。システムとしてのリモコンを「遠隔操作」ともいうが、「遠」より「隔」の方が、つまり、本体とコントローラーが分離していることの方が、リモコンの本質である。本書参考文献に示されている Jones 博士の論文から察するに、博士自身はむしろこのような農業利用の近接リモセンを研究しているようで、本書でも多くの紙幅が割かれている。

以上のように、本書は、リモセンをあまり理解していない生態学者、生物のことをよく知らないリモセン研究者、どちらにとっても有益である。その厚さゆえ、通読するのは容易ではないかもしれないが、リモセンについての原理からの解説書と考えれば、目次や索引を使つてつまみ読みという使い方もありではないだろうか。

以下蛇足。研究者どうしの会話では「リモセン」という短縮形が普通に使われるが、本書のような学術書のタイトルや本文に「リモセン」はなじまない。リモコンにならって漢字にするのなら、「遠隔観測」になるが一般的ではない。「リモートセンシング」は日本語としては無粋だが、やむをえないのだろう。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

綿貫豊著 (2013) 「ペンギンはなぜ飛ばないのか」 恒星社厚生閣 128pp. ISBN:978-4-7699-1464-8 定価 2600 円

評者の知るかぎり、著者は夏には北海道の離島で海鳥を、冬には北半島でニホンザルを追いかけている筋金入りのナチュラルリストである。そのため、たぶん本のタイトル「ペンギンはなぜ飛ばないのか」は一般受けしやすすいものにしてあって、中身の半分くらいは海鳥の生態について書かれているのだろうと思っていた。ところが、著者はいい意味で予想を裏切ってくれた。本書は海鳥の飛行と潜水を主題とした比較形態学・生理学の入門書である。

本シリーズは子供の理科離れを意識して小中学生向けに書かれている。そのため難しい漢字にはルビがふられてあり、各章では重力や浮力といった基本的な物理の解説が最初に必ずされた後、海鳥の形態や生理的な特性へと話が進んでいく。しかし、本書はどちらかという大人向けのレベルであり、小中学生が全部理解するのは難しいかもしれない。

「第 1 章 海鳥たち」では、筆者は最初に海鳥の種類について触れたあと、海にいる他の脊椎動物との違いについて述べている。海鳥もオットセイも陸上で子育てをするのだが、オットセイのミルクと海鳥の餌を 1g あたりのカロリーで比較すると 1/9～1/5 程度しかないので、海鳥は 5 倍から 9 倍鳥と餌場を往復しなければならないそうだ。海での大きな捕食者は冷たい海では海鳥やクジ

ラであるが、寒い場所でも体温を保つためには絶えず脂肪を燃やし続ける必要があり、そのために海鳥やクジラはたくさん食べなければならない。子育てや恒温性のために魚をたくさん食べなければならないという制約がこのようにして説明された後、第2章以降でそれを支える運動能力について話は展開してゆく。

海鳥が島と餌場とを何度も往復しなければならないことを踏まえて、「第2章 海鳥の運動能力」では海鳥の移動速度について話は展開する。海で魚をとった後は速く飛んで島に戻った方が何度もヒナに餌を運べるので有利である。たしかにカモメやアホウドリはそれで説明できるのであるが、飛べないペンギンは泳いで（それから歩いて）巣に戻ってくるのであるからどのような仕組みでその損失を補っているのか、できれば説明を入れて欲しかった。続いて海鳥の運動（飛行と潜水）を5つのタイプに分けて説明した後で、第3章から第7章までそれぞれのタイプについて個別に解説されていく。

「第3章 アホウドリは羽ばたかずに飛行する」では、アホウドリの滑空飛行について解説される。ワタリアホウドリという種は上昇気流のない海上で滑空を行うのに、海面20mまでの間で風速が大きく変わることを利用して、およそ20mの高さと海面とで方向転換を繰り返しながら移動するそうだ。筋肉をほとんど使わないので休んでいるのとはほぼ同じエネルギー消費で空中を移動しているらしい。

「第4章 ウミガラスは空中と水中を飛行する」では、空中と水中でのウミスズメの羽ばたきが主な内容である。ウミスズメは毎秒9～10回羽ばたいて空を飛ぶわけだが、そのため大胸筋がよく発達しており、水中でもこの大胸筋を使った翼の打ち下げで前に進むそうだ。結果としてウミスズメが水中を泳ぐときには上下に浮き沈むことになり、翼の打ち下げと打ち上げで同じように進めるペンギンに比べて効率が悪いことがわかりやすく説明されている。

「第5章 ペンギンが長く潜れるわけ」では、ペンギンが潜水時に心拍数を下げたり、血流を調節して末梢に血液があまりいき届かなくなったりすることで体温を下げることによって酸素消費量が減り、その結果長い時間潜水できることが説明されている。

「第6章 ウは空中と水中で翼と足ひれを使い分ける」では、重力と浮力が同じになる中性浮力深度についてはじめに説明された後、ウの仲間の足こぎによる潜水と浮上がどのようにして効率的に行われるのかが解説されている。

「第7章 海鳥の進化と運動様式」と「第8章 翼と足ひれを使う系統」では、鳥類の進化について述べられている。ここでは5番目の運動タイプとしてコバネウが紹介されている。著者によれば、海鳥の翼や足といった形態の変化は進化的な系統と直接には関係ないらしい。そして、海洋生活へ適応するにあたって、かつては本書で示した5つの運動タイプのどれもが有利になる可能性を持っていたそうだ。

「第9章 海鳥たちの悲劇」では、人間によって絶滅し、危機にみまわれている海鳥たちが紹介されている。過去

にあまりに海鳥の混獲が多いので北太平洋の公海上のサケ・マス遠洋流し刺網は全て禁止になったのだが、今でも日本の漁船はロシアの排他的経済水域内で入漁料を払ってサケ・マスの流し網漁をしているそうだ。

さらに、これから海鳥を研究する初心者を想定してであろう、本文中にはところどころに以下の様なメッセージが入っている。

「なぜだろう、と思うことこそ科学のはじまりだ。あたえられた問題を解くのは教科書や参考書を読んでがんばれば何とかなる。学校での勉強がそれだ。しかし、何が問題なのかは学校では教えてくれない。科学するうえで最も大事な問題は問題を見つけることだ。」(p.35)

「効率的に調査をしようとして無理をしてはいけぬ。調査地の偵察を何日かじっくりする余裕がほしい。事故を起こしかねないあわただしい調査がよい結果を生み出すことはない。」「だからといってあせりは禁物だ。1年は予備調査くらいのもりでないといけぬ。1年かけてその動物のことも調査地の様子も、また研究方法も十分にわかって準備をすれば、翌年にはかならずよい成果を上げることができるだろう。」(p.60)

自分の研究材料にしている生き物でも本書のように体系的に書かれた本があったら便利だと思うが、著者から、それなら自分で書いてみよう、と言われそうである。たしかに本書は、自分の研究対象でも比較研究をやってみようという気にさせてくれる一冊である。

(長崎大学熱帯医学研究所 角田 隆)

富士田裕子編著 (2014)「サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群—その構造と変化」北海道大学出版会 272pp. ISBN:978-4-8329-8214-7 本体価格 4,200円 + 税

本書は、間違いなく日本の湿原研究の金字塔である。サロベツ湿原は、北海道の北端近くの日本海側に位置する泥炭湿原である。開拓以前は、石狩川流域、釧路川流域に次ぐ広さを持ち、その1割以上の部分が、ミズゴケが地表を覆い、ホロムイヌゲ、ヒメシヤクナゲ、ホロムイツジなど湿原固有の植物が生育する高層湿原であったとされる(北海道開発庁 1963)。現在は、農地開発による面積の縮小に加え、排水路の造成による地下水位の低下、ササ優占群落の拡大、土砂堆積による沼の埋積などが進行している。このような状況を受け、2005年には「上サロベツ自然再生協議会」が設立され、多様な主体の参画による検討が進められている。

本書は、自然再生の基礎となる、対象地域の地理的生態的特性に関する多数の研究結果をまとめたものである。本書は大きく3つのパートから構成されている。最初のパートではサロベツ湿原を対象に、地形と形成過程、植物相・植生とその変化、湿原の水収支など水文学的特性、温室効果ガスの動態を含めたフラックスと微気象、泥炭の性質と堆積動態、湿原のリモートセンシング、エゾシカの分布と影響が述べられている。すべてが貴重な記録であるが、特に、植物相・植生に関する信頼性の高いリスト(あまりに徹底した調査のため過去の記録よ

りも確認種数が圧倒的に多くなっている)は、今後の自然再生の基盤情報として価値が高いものである。また植物の成長を水の挙動の関数で表現する独自のモデル(カレックスモデル)を用いて、複雑な池塘の微地形の生成過程を再現する試みなど、他の湿原での活用も可能な、興味深い知見が紹介されている。

二つ目のパートは、稚咲内砂丘林帯湖沼群の解説である。サロベツ湿原と日本海の間には、約 30 km にわたるおよそ 4 列の砂丘が成立しており、砂丘上にはミズナラやトドマツの林が成立し、砂丘列の間には大小さまざまな湖沼が多数存在している。これが稚咲内砂丘湖沼群である。日本の大部分の低地湖沼が、人間活動の影響により水文、水質、生物群集が大きく改変されているのに対し、稚咲内砂丘湖沼群は、自然の営力で形成された地形と植生、水文動態をみることができ、きわめて貴重な場所である。これまでほとんど調査が行われてこなかった「神秘的エリア」である稚咲内砂丘林と湖沼群について、本書では、その形成史、植物群落の分布と特徴、水文動態、周辺の河川や地下水との関係についての基礎的なデータを示し、総合的に解説されている。日本列島の自然の形成史として、また今後の自然再生の検討における基礎情報として、きわめて価値が高い資料といえるだろう。

最後のパートは、「開発、環境変化と自然再生」と題し、湿原、砂丘林、湖沼群を含む一帯の開発とそれに伴う環境変化について解説するとともに、変化した場所の自然再生やモニタリングが述べられている。また、現在進められている自然再生事業とモニタリングの結果について

も紹介されている。このパートでも、丁寧なデータの積み上げによる慎重な議論が貫かれている。

本書の価値の神髄は、基礎調査の結果としての「データ」にある。人間が湿原に求める要求は時代によって変化するが、本書に掲載されている基礎的データは、どのような時代であれ価値をもつ、知的財産である。しかし、単にデータの記載に終わっていないところが本書の魅力ある。湿原は、植物の成長、水の動態、泥炭の供給と分解といった要素で変化する動的で複雑なシステムである。本書は、複雑に影響しあうこれらの要因の関係を、初学者でも理解できる図表を多用して説明しており、湿原という複雑系を読み解く面白さを伝えている。

多岐にわたる内容を含む本書を貫いているのは、歴史的産物である湿原を後世に残し、また劣化した要素は少しでも回復させようという思想である。「湿地再生」が自然を守る行為の代名詞のように捉えられる欧州諸国に対して、日本は湿地の価値や現状についての一般的な認識は大きく遅れている。泥炭湿地を乾燥化させて農地や居住地を拡大してきた北部ヨーロッパに対して、低地氾濫原での水田開発を進めてきた日本では、湿地の喪失とそれが引き起こす問題が認識しにくかったことはその一因であろう。しかし日本においても、湿地の喪失と劣化は確実に進行している。本書は、そのことを説得力のあるデータで説明している。泥炭湿地の研究者のみならず、広く「湿地の保全生態学」を志すのであれば、座右におくべき一冊といえるだろう。

(東邦大学理学部生命圏環境科学科 西廣 淳)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 齊藤 隆 2014.1 ~ 2016.3
 業務執行理事
 （次期会長候補） 可知 直毅 2014.1 ~ 2016.3
 （専務理事） 岡部貴美子 2015.1 ~ 2017.3
 （庶務担当） 石井励一郎 2015.1 ~ 2017.3
 （会計担当） 池田 浩明 2015.1 ~ 2017.3
 （ER 編集担当） 久米 篤 2014.1 ~ 2016.3
 （生態誌編集担当） 古賀 庸憲 2014.1 ~ 2016.3
 （保全誌編集担当） 長谷川雅美 2015.1 ~ 2017.3

理事（2014.1 ~ 2016.3）

浅見崇比呂 巖佐 庸
 大手 信人 黒川 紘子
 竹中 明夫 辻 和希
 中野 伸一 西廣 淳
 半場 祐子 宮下 直
 矢原 徹一 吉田 丈人

監事 小泉 博 2014.3 ~ 2016.3
 陶山 佳久 2015.1 ~ 2016.3

代議員（2014.1 ~ 2015.12）

全国代議員 大手 信人 粕谷 英一
 加藤 真 河田 雅圭
 近藤 倫生 竹中 明夫
 辻 和希 中静 透
 中村 太士 西廣 淳
 日浦 勉 宮下 直
 宮竹 貴久 矢原 徹一
 吉田 丈人

地区代議員 野田 隆史（北海道）
 松木佐和子（東北）
 上條 隆志（関東）
 浅見崇比呂（中部）
 井鷲 裕司（近畿）
 永松 大（中国・四国）
 巖佐 庸（九州）

Ecological Research 編集委員会（2014.1 ~ 2017.12）

Editor-in-Chief 久米 篤
 Managing Editor 鈴木準一郎
 Associate Editors
 in-Chief 福井 学 大手 信人
 野田 隆史 李 博
 Ming Dong 井鷲 裕司
 石井 弘明 金子 信博
 熊谷 朝臣 三木 健
 野口 航 陀安 一郎
 富松 裕 辻 和希

Handling Editors

小野田雄介 齊藤 隆
 露崎 史朗 山浦 悠一
 伴 修平 半場 祐子
 梶 光一 菊沢喜八郎
 木庭 啓介 工藤 岳
 松尾奈緒子 仲岡 雅裕
 大塚 俊之 佐藤 一憲
 陶山 佳久 瀧本 岳
 日浦 勉 濱村奈津子
 北村 俊平 松崎慎一郎
 村上 正志 村岡 裕由
 中路 達郎 奈良 一秀
 工藤 洋 江成 広斗
 角谷 拓 大橋 瑞江
 平田 竜一 福井 大
 兵藤不二夫 飯島 勇人
 鏡味麻衣子
 Min Cao Jae Chun Choe
 Franck Courchamp Stuart J Davies
 Jingyun Fang Raghavendra Gadagkar
 Rhett D. Harrison Sun-Kee Hong
 Bas W. Ibelings David W. Inouye
 Kari Klanderud Simon A. Levin
 Mathew A. Leibold Mark D. Scheuerell
 Janne Sundell Ping Xie
 Hoi Sen Yong Niels.P.R.Anten
 Yunting Fang Jan Frouz
 Andrew Lohrer Zhijun Ma
 Ariel Novoplansky Eun Shik Kim
 Stephen D. Sebestyen Stephanie A. Bohlman
 Brenden Holland Tsewang Namgail
 Pil Sun Park Bo Song
 E. Ashley Steel Arndt Telschow
 Jeremy T. Lundholm Sergio R. Roiloa
 Cindy Tang

日本生態学会誌編集委員会（2014.1 ~ 2016.12）

編集委員長 古賀 庸憲
 編集幹事 伊東 明 大塚 俊之
 芝田 史仁
 編集委員 沖津 進 市岡 孝朗
 小林 剛 津田みどり
 北出 理 土田 浩治
 村岡 裕由 永光 輝義
 相場慎一郎 和穎 朗太
 島野 光司 金尾 滋史
 鈴木 英治 嶺田 拓也
 村上 貴弘 河口 勇生
 肘井 直樹 戸丸 信弘
 中川弥智子 笠原 玉青
 岡野 隆宏 鏡味麻衣子
 今藤 夏子 高田 宜武
 箱山 洋 山浦 悠一

保全生態学研究編集委員会 (2015.1 ~ 2017.12)

編集委員長	長谷川雅美		
編集幹事	角野 康郎	西廣 淳	
編集委員	井口恵一朗	石井 実	
	石濱 史子	井上 幹生	
	植田 睦之	梅原 徹	
	加藤 真	角谷 拓	
	河口 洋一	倉本 宣	
	小池 文人	高田まゆら	
	高槻 成紀	中越 信和	
	早矢仕有子	藤井 伸二	
	増田 理子	三橋 弘宗	
	山本 智子	湯本 貴和	
	横溝 裕行	横山 真弓	
	細 将貴	奥山 雄大	

中丸麻由子	小泉 逸郎
立木 佑弥	三木 健
北島 薫	森長 真一
塩尻かおり	

生態学教育専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	西脇 亜也	
副委員長	畑田 彩	
非教育学部系枠：	嶋田 正和	中田 兼介
教育学部系枠：	平山 大輔	丑丸 敦史
	三宅 崇	
高校教員枠	広瀬 祐司	中井 咲織
	宮田 理恵	
博物館枠	亀田佳代子	白川 勝信

自然保護専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	加藤 真	：海洋
副委員長	吉田 正人	：関東・自然公園・ エコツアーリズム
	井田 秀行	：MAB
幹事	須賀 丈	：中部
地区選出委員	露崎 史朗	：北海道
	紺野 康夫	：北海道
	竹原 明秀	：東北
	東 信行	：東北
	川上 和人	：関東
	和田 直也	：中部
	野間 直彦	：近畿
	中井 克樹	：近畿
	井上 雅仁	：中国・四国
	大田 直友	：中四・四国
	逸見 泰久	：九州
専門別委員	伊澤 雅子	：九州
	増沢 武弘	：高山・亜高山・MAB
	竹門 康弘	：陸水
	清水 善和	：島嶼
	久保田康裕	：熱帯・亜熱帯
	横畑 泰志	：寄生生物
	阿部 晴恵	：遺伝子
	三浦 慎吾	：鳥獣管理
	竹中 千里	：大気汚染
	矢原 徹一	：海外渉外
	村上 興正	：環境行政
	安溪 遊地	：エネルギー問題
	角野 康郎	：湿地

大規模長期生態学専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	日浦 勉	
	伊東 明	大手 信人
	黒川 紘子	三枝 信子
	柴田 英昭	鈴木 智之
	仲岡 雅裕	中村 誠宏
	正木 隆	

生態系管理専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	鎌田 磨人	：里山・協働
副委員長	松田 裕之	：野生生物管理
幹事	西廣 淳	：河川・湖沼・防災
	橋本 佳延	：里山林・草原・協働
	角野 康郎	：湖沼・河川・湿地
	國井 秀伸	：汽水・河口
	古賀 庸憲	：海洋
	佐藤 利幸	：高山
	塩坂比奈子	：普及
	白川 勝信	：湿原・草原・協働・制度
	高村 典子	：陸水
	竹門 康弘	：河川
	津田 智	：草原・湿地
	富田 涼都	：環境社会学
	中越 信和	：景観生態
	中村 太士	：河川
	西田 貴明	：協働・制度設計
	日鷹 一雅	：水田・農業生態系管理
	平吹 喜彦	：震災復興
	逸見 泰久	：渚・海洋
	正木 隆	：森林・林業
	三橋 弘宗	：河川
	村上 興正	：自然保護
	谷内 茂雄	：流域管理モデル
	矢原 徹一	：保全生物学
	山田 俊弘	：森林

将来計画専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	辻 和希	
	巖佐 庸	奥田 昇
	粕谷 英一	五箇 公一
	酒井 章子	佐竹 暁子
	田中 健太	仲岡 雅裕

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

大園 享司	2013.6 ~ 2015.12
-------	------------------

	中野 伸一	2013.6 ~ 2015.12		栗和田 隆	2014.4 ~ 2017.3
	野田 隆史	2013.6 ~ 2015.12		小口 理一	2015.4 ~ 2018.3
	工藤 洋	2014.8 ~ 2016.12		永松 大	2015.4 ~ 2018.3
	近藤 倫生	2014.8 ~ 2016.12		池田 紘士	2015.4 ~ 2018.3
	松浦 健二	2014.8 ~ 2016.12			
			高校生ポスター部会		
			西脇 亜也	2014.4 ~ 2017.3	
			高原 輝彦	2014.4 ~ 2017.3	
			嶋田 正和	2012.4 ~ 2016.3	
			丑丸 敦史	2013.4 ~ 2016.3	
			竹下 俊治	2013.4 ~ 2016.3	
			土居 秀行	2013.4 ~ 2016.3	
			中井 咲織	2014.4 ~ 2017.3	
			栗和田 隆	2014.4 ~ 2017.3	
			富山 清升	2014.4 ~ 2017.3	
			小口 理一	2015.4 ~ 2018.3	
			深澤 遊	2015.4 ~ 2018.3	
			英語口頭発表部会		
			三木 健	2013.4 ~ 2016.3	
			日室 千尋	2014.4 ~ 2016.3	
			辻 和希	2013.4 ~ 2016.3	
			久米 朋宜	2013.4 ~ 2016.3	
			田中 健太	2013.4 ~ 2016.3	
			藤井 一至	2013.4 ~ 2016.3	
			杉浦 真治	2015.4 ~ 2016.3	
			韓 慶民	2015.4 ~ 2016.3	
			仲澤 剛史	2015.4 ~ 2016.3	
			野外安全管理委員会		
			委員長 鈴木準一郎	2014.4 ~ 2016.3	
			粕谷 英一	2014.4 ~ 2016.3	
			石原 道博	2014.4 ~ 2016.3	
			北村 俊平	2014.4 ~ 2016.3	
			大館 智志	2015.4 ~ 2017.3	
			飯島 明子	2015.4 ~ 2017.3	
			奥田 昇	2015.4 ~ 2017.3	
			キャリア支援専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)		
			委員長 別宮 (坂田) 有紀子		
			副委員長 中坪 孝之		
			深谷 肇一	富田 基史	
			西田 貴明		
			宮下 直 (2015.4 ~ 2017.3)		
			鈴木 智之	佐々木晶子	
			岩井 紀子	木下 晃彦	
			松木佐和子 (2015.4 ~ 2017.3)		
			オブザーバー 可知 直毅	半場 祐子	
			三宅 恵子		
			電子情報委員会 (2014.1 ~ 2016.3)		
			委員長 竹中 明夫		
			久保 拓弥	大澤 剛士	
			富田 基史	眞板 英一	
大会企画委員会					
委員長	半谷 吾郎	2014.4 ~ 2016.3			
副委員長	川北 篤	2015.4 ~ 2017.3			
運営部会	辻野 亮	2013.4 ~ 2016.3			
	中川弥智子	2014.4 ~ 2017.3			
	竹中 明夫	2005.1 ~ 2017.3			
	北村 俊平	2011.4 ~ 2016.3			
	三木 健	2012.4 ~ 2016.3			
	富松 裕	2014.4 ~ 2017.3			
	小池 伸介	2015.4 ~ 2018.3			
	田邊 晶史	2015.4 ~ 2018.3			
	高橋 佑磨	2015.4 ~ 2018.3			
(広報)	佐々木晶子	2014.4 ~ 2016.3			
	藤田 志歩	2015.4 ~ 2017.3			
シンポジウム部会					
	柴田 銃江	2014.4 ~ 2017.3			
	清野 達之	2015.4 ~ 2018.3			
	岩崎 巨典	2012.4 ~ 2016.3			
	横溝 裕行	2013.4 ~ 2016.3			
	東樹 宏和	2013.4 ~ 2016.3			
	小林 真	2013.4 ~ 2016.3			
	大西 尚樹	2013.4 ~ 2016.3			
	福島慶太郎	2014.4 ~ 2017.3			
	曾我部 篤	2014.4 ~ 2017.3			
	岩田 繁英	2014.4 ~ 2017.3			
	及川 真平	2015.4 ~ 2018.3			
	佐藤 拓哉	2015.4 ~ 2018.3			
	熊野 了州	2015.4 ~ 2018.3			
	若松 伸彦	2015.4 ~ 2018.3			
発表編成部会					
	牧野 能士	2014.4 ~ 2017.3			
	西廣 淳	2015.4 ~ 2018.3			
	山本 智子	2013.4 ~ 2016.3			
	松尾 奈緒子	2013.4 ~ 2016.3			
	櫻井 玄	2013.4 ~ 2016.3			
	山平 寿智	2014.4 ~ 2017.3			
	小泉 逸郎	2015.4 ~ 2018.3			
	土松 隆志	2015.4 ~ 2018.3			
ポスター部会					
	内海 俊介	2013.4 ~ 2016.3			
	小野田雄介	2014.4 ~ 2017.3			
	安立 美奈子	2013.4 ~ 2016.3			
	金田 哲	2013.4 ~ 2016.3			
	上村 真由子	2013.4 ~ 2016.3			
	高原 輝彦	2013.4 ~ 2016.3			
	土居 秀行	2013.4 ~ 2016.3			
	赤坂 卓美	2014.4 ~ 2017.3			



京都大学
生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2016 (平成28) 年度 共同研究公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010 (平成22) 年度から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として活動してまいりました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や研究集会・ワークショップなどの公募を毎年行っています。2016 (平成28) 年度の公募につきましては11月より開始の予定です。詳しくは、その時期のセンターホームページをご参照ください。

2015年度開催の研究集会・ワークショップ

『若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖』

開催日: 2015年8月17~24日 開催地: 京都大学生態学研究センター、琵琶湖

問い合わせ先: 中野伸一 (京都大学生態学研究センター・教授) (E-mail: nakano@ecology.kyoto-u.ac.jp) ※ 終了しました。

『安定同位体生態学ワークショップ2015』

開催日: 2015年8月28~9月3日 開催地: 京都大学生態学研究センター

問い合わせ先: 陀安一郎 (総合地球環境学研究所・教授) (E-mail: ichirotoyasu@chikyu.ac.jp) ※ 終了しました。

『生物・生態系情報の統合と活用: 長期変動の検出と時系列データの正しい見方』

開催日: 2015年9月14~16日 開催地: 国立環境研究所

問い合わせ先: 日浦 勉 (北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・教授) (E-mail: hiura@fsc.hokudai.ac.jp) ※ 終了しました。

『2015年度 勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の分子生物学」』

開催日: 2015年12月5~6日 開催地: 東京海洋大学

問い合わせ先: 吉田弥生 (京都大学野生動物研究センター・研究員) (E-mail: yyoshida@wrc.kyoto-u.ac.jp)

『進化と生態の階層間相互作用ダイナミクス: 生態学のリストラ2』

開催日: 2015年12月5~6日 開催地: 京都大学生態学研究センター

問い合わせ先: 辻和希 (琉球大学農学部・教授) (E-mail: tsujik@agr.u-ryukyuu.ac.jp)

『奄美群島自然史学 一亜熱帯島嶼の生物多様性を研究する一』

開催日: 2016年2月13日 開催地: キャンパスプラザ京都

問い合わせ先: 水田 拓 (環境省・奄美野生生物保護センター・自然保護専門員) (E-mail: TAKU_MIZUTA@env.go.jp)

センター関係者の動き

慶応義塾大学自然科学研究教育センターの程木義邦助教が、7月16日付で特定准教授に着任しました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
次年の会費は10月以降に請求をします。会費未納者に対しては6月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：一般社団法人日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイト申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000円 (13000円)	○	○
正会員（学生）	8000円 (10000円)	○	○
賛助会員	20000円 (22000円)	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。

なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中国・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。